

結草

kusamusubi

publishing house: moriyama 2-19-52 Kanazawa
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2011.09.01

ただいのつむひ

唯信寺住職

中村 寅雄

す び

皆さん、こんにちは。暑い中をよろこそお参りいただきました。久しぶりで浄光寺さんへお参りさせていただきましたきました。もう何十年前も前に、一回か二回かご縁をいただいたかと思えます。皆さん方の中に別院へお参りされるような方がありません。時々私、別院でお話させていたいただきますので顔だけは覚えておったださる方もお在りでないかと思えます。

さきほど車で門の前へ止めて中へ入る時に看板がでておりました。「追弔会」^{ついで}、皆さん方の肉親の方で

亡くなられた方、先立っていかれた方の今日はお経があがったこととございます。ですからお寺はそういう先立っていかれた肉親の方々の死を通してあとに残った者が仏様の教えに出遇わせていただく、仏様のところに上遇わせていただく、それが浄土真宗の教えであります。私がかねがね思っておりますのは、皆様方浄土真宗の方々であります。家にはお内仏があつて、そしてそれぞれの仏事。毎月の月参りから年忌の年になればご法事をもうして報恩講^{ほうおんこう}さんになれば年に一回必ず

報恩講さんをもうす。これが浄土真宗の人の勤めでありますね。

しかし本当に浄土真宗の念仏のところに、教えに、出遇うておるかどうか。そのところになるとやはり危ないですね。

今の時代、本当に恵まれた時代です。我々の先祖の、皆様方の親、それからそのもう一つ前の親。私は今七十三になりましたが、終戦が小学校二年生やった。だからあの前後の食べるものがなかった時代をよく今でも覚えています。我々の親の時代まではね、今我々が味おうておるこういう豊かな生活ということ

はなかつたんですよ。その日その日の食べるものにさえ苦労して係り果てていたんです。しかしあの頃を思い出すとそのことを思い出しながら本心に周りの人たちと助け合いながらみんな生きた時代だと思っております。どこからかおはつつか（お初穂^{はつは}）もろうとそれを隣の家に半分わけてあげるとかね、そんなことが日常茶飯^{にちじょうさはん}の生活の中にありました。隣近所との付き合いが非常に強い、そういう時代でありまし

た。今の時代はこれだけ豊かな時代になって物が満ち溢れておる時代です。ほんならそれで万々歳かというたらそうでないやね。

本当に自分を取り囲むものはみんな満たされておるけれども何十年も生きてきて立ち止まって振り返ってみたら、一体六十年も七十年も八十年もこの歳まで生きてきてきたけども一体何をしてきたのか、そういう一つの大きな課題があると思うわけがあります。

私がかねがねお念仏の教えは、ほんな珍しいことを聞くんでない。「親鸞^{しんらん}めずらしき法をもひろめず」^{おんみ}御文さんの第一帖^{だいいちしゅう}にできてきます。同じ事を繰り返し繰り返しお聞かせをいただく中にね。仏法の世界はここでわかったわからんの世界ではない、頭でわかったわからん世界ではなしにね、この毛穴から染み込んでいく世界、それがお念仏の世界なんだというふうに教えられます。ですから私は今日ここにこうして暑い中をね、何十人もの方々お一

人おひとり、お寺からの誘いもあつ

たでしょう、皆さん方の思い立ちも

あつたでしょう、しかしねもう一つ

ね皆さん方お一人おひとりが今日こ

のお寺へ足を運んでここに身を据え

ていただいたということは、もう一

つお寺からの誘い、自分の思い立ち

にくわえて、先立っていかれた肉親

の方々が皆さん方の背中を押し出し

てこの場にね、身を運ぶことができ

た。そういうのはたらきをね、私は一

つ忘れないでいただきたい。そうい

うことを思うわけでありませう。お話

がわかつたわからんの世界ではなし

にこの場に身を据える、お話を聞く

場に身を据えるということが私は何

よりも大事なことだとおもうわけ

あります。

いきと生きていける世界。

「欲もおおく、いかり、はらだ

ち、そねみ、ねたむころをおおく、

ひまなくして臨終の一念にいたる

までとどまらず、きえず、たえず」

(『一念多念文意』)これ親鸞聖人の

御言葉です。これ我々のことです。

「いかり、はらだち、そねみ、ねたむ

ころをおおく」これはみんなね、お

こそうと思うておこるころではな

い。縁に触れたらいつ何時どこでこ

のころがおこつてくるかわからん

のですよ。

今うちのお寺の掲示板に貼つてあ

る言葉があります。「煩惱具足とは

どんな汚い心もみんな私の中にある

ということですよ」こういう言葉です。

煩惱具足、煩惱具足の凡夫といいま

すね、浄土真宗の教えでは。煩惱具

足、煩惱というのは赤ちゃんがオ

ギャーと生まれた時から煩惱は完全

に完成してしまつとるがや、備わつ

とるがや。どんな小さい赤ちゃんで

もね、自分の思い通りに気にくわん

ことがあつたら泣き散らすね。腹が

減れば泣き散らす。煩惱具足しとる。

れもおらんのや、赤ちゃんに。そや

けどもちゃんと身に備わつとるみんな

な。だから縁に触れたらどんな醜い

汚い心もみんな私の心の中におこつ

てくるのかわからない、そういう身

を今生かされて生きとるということ

や。

私はね、ちょうど五年前に心臓の

手術をしまして、まあこれ大手術で

した。心臓弁膜症で心臓の弁を取替

える手術でした。人口の弁がここに

今入つとる、この心臓に。そしてこ

こにペースメーカーも入つとる。それ

でまあ五年間だんだんと体が回復し

てここまで来ることができました。

私はね、この手術を通して本当に

思うたのは、自分がどう思おうとも

この命はね、命の営みは、私の思い

を超えたところでの営みねん。だか

ら生かされておるといふことです。

自分の命、自分の命と言つとるけど

ね、自分でどうにもならん命ねん、

この命は。そういう命を今いただい

て生きとる。まあしかしね、こうい

うても我々の毎日の日常生活の中で

はね、我が身はかわいい、我が身ほ

つも自分中心に物事を考え判断して

生きておる。

こういう言葉にこの間出会いまし

た。「あいつが悪い、あの人が悪い、

なぜかいつも正しい私」いつも私は

正しいところにおるんやね。そして

人を天秤にかけて、我が身の判断で

あの人はいい人や、悪い人やいうと

る。そして自是非、自分が良くて、

あの人が悪い、そういうことですね。

あの人のおかげで私は今こんな酷い

目に遭わんなん。他因自果、あの人

があんなこというたおかげで、あれ

が原因で私はこんな酷い目に遭わん

なん。そういう毎日の生活ですけど

ね、生きておる生活感覚はみんなそ

うです。そういう私の生き方が仏様

の教え、なんまんだぶつの教えは何

を教える教えなのか。

平野修という先生はね「念仏とい

うのは我が身に目が覚めるといふ意

味が念仏の中身です」こういうふう

に教えてくださいます。念仏は呪文

ではないんです。浄土真宗の念仏は

我が身にこの身に。私、いつもご法

事に行つたらこんな話をするんやけ

どね。他人のことはよう見えるんや、

この目は。ふたつ目がついとるけどね。特に他人の悪いことはよう見える目です、これは。ところが一番近くにおつて一番見えんのはこの我が身なんです。念仏の教えはひとえにこの我が身に光を当てようとする。一体おまえはどういう身を生きておるのか。我々はみんな「わたし」という人間は自分で自分をこういふもんやとすることはみんな頭の中心の中で思っておるわね。それはどこどこまでも我が身に都合のいい自分でありませう。

ある先生はね、この浄土真宗の教えは難しい。難しい、難しいと言われる難しさは何かというたら自分の正体に出遇うことの難しさや、こういうふうに教えてくださいます。なかなかこれは簡単なことではないね。我が身の正体は見たくないから。どろどろしたこんな汚い我が身の心に会いたくないから。なかなか正体に出会ふことが難しいんです。それが教えの鏡に照らされることによつて我が身に目が覚める。

今でも御存命ですけどね、白山市にこういう方がおられます。

浅田正作さんという、大変な念仏者でね。この方が『骨道を行く』という詩集を出しておられる。この中のひとつにこういう詩があります。「自分が可愛いただそれだけのことで生きていたそれが深い悲しみとなったときちがった世界がひらけて来た」お念仏の教えに少しづつ耳を傾けさせていただくことによつて自分の有り様が一つひとつ見えてきた。そうするとそういう自分が可愛いという思いで生きてきた自分の有り様が悲しみとなったとき、ちがった世界がひらけて来た、ここが大事であります。

私はいつもお話するのですが、お念仏の教え、毎日の日暮しの中で私の生きる支えとなり力にならんような念仏なら、これ生きた念仏でないんや。なんまんだぶつと念仏申すところに深くわが身に気づかせていただく世界が開ける。清沢満之という明治に出られた先生がこういう言葉を残しておられます。「信ずるは力なり」この力は如来様から賜る力です。

仏様から賜る力。

私はこの夏、先月の下旬、二十二日に暁天講座のお話に福井の別院に始めて行きました。そして金沢の別院は先月の二十七日の朝、それから三十日が鶴来の別院のお話に行つてきました。この三つの別院の暁天講座のお話に講題を出してくれといわれるもんで講題を出しました。「このことひとつ」こういう講題を出させていただきました。これは親鸞聖人の御言葉であります。「唯信鈔文意」の冒頭に出てくる言葉です。「唯というはこのことひとつというところなり。ふたつならぶつとをきらうことばなり」あれもこれもではない。このことひとつ。このこととは一体何かといつたら親鸞聖人は信心とおっしゃる。浄土真宗における信心、信ずる心と書きますけれども、私が仏様を信ずるといふ信心ではない。この信心は如来様から賜る信心です。如来回向の信心。如来様から我々に届いてくださる信心、ここです。如来様とか仏様とか先ほどからお話しますけれども、お浄土、命終わつて浄土に還らして

いただく。お浄土、真実いのちの世界から娑婆世界で迷うておる我々に我は南無阿弥陀仏なりと名乗り出られた、それがなんまんだぶつという念仏です。だからお浄土と娑婆世界に住む我々との架け橋はこのひとつです。如来様の真が南無阿弥陀仏となつて私どもに呼びかけておつてくださる。この呼びかけがなんまんだぶつなんです。ですからなんまんだぶつという念仏は如来様の真です。そして私どもに届いてくださる、そういう如来様の真が私どもの心の底に響いて届いてくださるところに如来様から賜る信心という世界が私の上に開かれてくる。一番初めに申しました、我々がいきいきと生きていく世界、煩惱いっぱいの中でいきいきと生きていく世界をみんな求めておる。ほんならそういう世界が私の上にどうしたら開かれてくるのかというたら、まずよきひとのおおせをいただく。そして真実の教えをいただく。そして三つ目には如来様の智慧をいただく。このことを通さん限りは我々のうえに煩惱いっばいの真つ只中でしつかりと今与えられた

生活の場で足をしっかり地につけて何が起こってこようともししく受け止めて立ち上がって、生きていく力を如来様から賜る。そういう生き方なんですよ、我々の念仏の教えに生きるということは。はじめから難しい話になりましたがね。

中学校、高校、大学、そして社会人になってという、そういう道筋があるわけですが。そういう教育課程の中で心の教育をする場所がないんです。今の親御さんもそういう教育を受けとらんから子供にそんな教育で

きるはずない。
小学校六年生の男の子がね、こういう作文を書いた。恐らく勉強できる子やったんやろうね。「僕はお母さんが大好きです。一生懸命勉強していい高校に入って、そして一流の大学に入って、そして一流の企業に就職して、沢山給料を貰うようになって、お母さんにとびつきり上等の老人ホームへ入れてあげたいと思いま

す」こういう小学校六年生の男の子が書いた作文なんですよ。どうか、寂しいいけ。「一流の企業に就職して沢山の給料を貰うようになってお母さんにとびつきり上等の老人ホームへ入れてあげたいと思います」本当に真面目にそういう作文を書いておるがや。
私ね、大分前ですけども粟ヶ崎の方にあの当時金沢では指折りの老人ホームがありました。そこにね、病

小松にね、お念仏に生きたお婆あちゃん、非常に念仏者の方がおられました。この方も亡くなった。山越初枝さんが七十六歳の時にね、こういう言葉を残しておつてくださるがや。「ただ子供育てて財産残してというけどそれだけやったら人間の一生で寂しいもんや。我々に一億の金持たしたつてなんになるいね。心の財産ないほどの貧乏人はおらんわ。そしてみたら子や孫に残すとうたつてなんまんだぶつ残さな、どうするいね」こういう言葉です。心の財産ないほどの貧乏人はおらんわ、どうも今の時代ここが一番足りない部分のようですね。

小さい小学校の時代から小学校、

院の先生のお母さんが入所したんやね。昔から私はその家に月参りに行つとつたもんで、そうしたら若い人がその老人ホームへ私に月一回お参りに行つて欲しいというがや。小さい仏壇も買うたちゅうがや。そしてそこへ半年か一年位お参りに行つたかね。そこのお母さんの部屋へ行くまでに二階までエレベーターに乗って行かんなん。二階のお母さんの部屋を出て下へ降りようとエレベーターを待つとつたら、そのエレベーターの横の廊下にこんな椅子が二つ置いてあつて、そこで入所してお婆あさんが二人こういう会話をしておるのが聞こえてきた。「あんなにかいいことないかいね」そして「なんもいいことないわいね」こういう会話です。もうねその老人ホームは至れり尽くせりやから亡くなるまでそこにおれるがや、すぐ横に病院があつてお医者さんもおる。一千万円以上出さんとそこに入所できんや。毎月二十万円以上出さんとそこにおれん。そういう恵まれた中におりながら「なんかいいいことな

いかいね」と、寂しいね。「なんもいいことないわいね」
我々も間違いなくまた命終わつていきます。それがいつくるのかかわらんのですよ。他人と代わることできんのですよ。やり直しも出来んね。そして必ず終りが来るんや、私の上にも。それがいつ来るんかわからんのですよ。順番というわけにいかんや。人間の命、そういう身を今生きとるわけです。「このことひとつ」とは信心。仏様のところに遭遇していただく。そうすると如来様のところが私に届いてくださるといふことは自分の姿が一つ一つあからさまになる。そこから見えてくる世界はこういう世界や。私の驕りおごりの心。身勝手な心。浅ましい心。醜さ、本当に何処を探してみても私の心の中には真といえるものはないな。そのことがよくよく見えてくる。仏法聴聞によつてそういう世界が見えてくるんです、一つひとつ。

先ほどの浅田正作さんの詩です。「それが深い悲しみとなった時、ち

がった世界がひらけてきた」素晴らしいですね。違った世界が私の上に開けてくる。違った世界が開けてくることによってね、私が生きていくよりどころ、支え。仏様の教えをよりどころとし、そして仏様の教えから、如来様から生きる力を賜る。そうすると具体的にね、しっかりと今与えられた生活の場で地に足をつけて。次から次へといろんな事が起こってくるんですよ。人間ちゅうのは本当に起こってくるともう立て続けに起こってくるがや、思わんことが。良い事ならいいけどなんも良くないことが次から次へと起こってくる。しかしね、人間それをなかなか受け止めていけないのや。それから何とかして逃れようとするがや。お念仏のところに生きるということは私に起こってきたことはしっかり受け止めて、そこから立ち上がって生きていく力を仏様から賜る。他力回向の信心です。

の「暮らしの日記」という記事がありますかね。ある時「息子に導かれて」という題で押水の方で四十七歳のお母さん、この方がねこういう文章を寄せておられました。「昨年春、突然に息子を亡くして以来、亡き子の服を撫でながらどれだけ涙したとか。しかしいつまでも去年の今頃などはどと面影や思い出ばかりを追ってはおれぬ。一周忌にお前のお陰であちこちのお寺にお参りさせていただいてありがとう、と手を合わせたなら母ちゃん良かったなあと云ってくれそうな気がする。これからは今に感謝して生きていこう。あるお寺には何事も無いようにとお参りするのではなく、何事が起きようともこれを受け止めて生きる身であるようにお参りするのであるとあった。また別のところでは「我を問い、己育むお念仏」とあった。これも有り難い出遇いの言葉として手を合わせたい」こういう文章が「暮らしの日記」にあった。すばらしいね。この息子さん、四十七歳のお母さんですから恐らく突然の息子さんの死、二十歳前後でしょう。息子さんを突然亡く

して途方に暮れておる、そういう中でお寺さんへお参りさせていただく縁をいただいた。そして「母ちゃん良かったなあ」と息子さんの声無き声が聞こえてくるようだという、そういう声無き声を聞きとるという耳がこのお母さんの聴聞を通してお母さんの耳に開けてきたんですよ。「母ちゃん良かったなあと言ってくれそうな気がする」聞きとる耳がこのお母さんのところに開けてきたんですよ。素晴らしいじゃありませんか。

へ通うておいでるようになった。別院に真宗学院という夜学の学校があるんです。一ヶ月に一週間程の授業があるね。夕方六時から八時まで二時間の授業がある。それで一般の方もそこへ聴講生が入ってこられる方も多いんですが、このお父さんもそこへ聴講生として入ってこられた。私はその学院にその当時関わったものですから知り合いになって、それで三年間でそのお父さんは学校は終わったけれども、ずっと私のお寺の聞法会に二十年以上も通ってくださった。そしたらね、このお父さんはそういう息子さんの死ということがあるまでお寺とのつながりはお盆に一回墓参りに行くだけのつながりやった。ところがそのことをきっかけにして一生懸命お念仏の教えを聞くようになった。そしてねあれは十三回忌位の時やったかな、このお父さんと一緒に松任(白山市)に良い先生がおいでるちゅうもんで私の車の横に乗せて一緒にその人とお話を聞きに行ったんやね。松任へ行く途中ね、「あんた、しかしよう話聞かれるようになったね」と呼びかけ

たらこのお父さんから返ってきた返事がね「これはみんな息子のおかけや」と一言返ってきた。素晴らしいね。息子さんの突然の死、これほどの悲しみの極みの出来事はないわけですよ。そうでしょ。これ以上の悲しみはないわいね。そうやけどもそれ以上の深い悲しみがないほどのことに出会いながら、そのことがあとに残ったお父さんの仏縁が開かれる大事なご縁になった。

す び 　　そうするとね、恐らく二十八歳ですからこの息子さんは一遍も念仏申したこともなかったでしょう。仏壇に手を合わせたこともなかったかもしれない。しかしこの人の死を通してあとに残ったお父さんの上に仏縁が開かれたちゆうことは、このお父さんにとってはこの息子さんは諸仏です。仏様です。息子のおかけでと言うた。そこにこの息子さんと共にお父さんが助かっていける世界が開けてきたということがあります。それが念仏の教えの出遇いや。

皆さん方、今日沢山のお参りですけれども、亡くなった方々を肉親の

方々をあとに残った皆さん方お一人おひとりが仏様と拝がましていただく身に自分が今なっておるかどうか。人間死んでもうたらほんで終りや、こんな寂しい話ないぞいね。

こういっておばあちゃん言葉があるんです。中田ツヤさんという小松のおばあちゃんや。このおばあちゃんがね「娑婆が結構やというところは一番不幸なことや」今みんな結構な娑婆やわね。食べたいもの食べられるし、行きたいところ行けるし、なに不自由ない生活。そうしたら次におばあちゃんどう言うたか「ごまかし、ごまかししておるうちに娑婆あつという間に終わってしまうがやさけに」と。別にそんな我々はごまかし、ごまかし生きておるわけではない。目の前のことに一生懸命汗を流して生きとるんやけども、それがこのおばあちゃんから言うたら大事なことを忘れておるぞということをおばあちゃんと言いたいがや。次におばあちゃんがこういふことを言う「私は今までお浄土の真ん中におつてどこかにいいところないかと思つて苦しんどつたわけや。ほんまにひっくり

返つてみたらそこがお浄土やった」仏様の私どもに目覚めを促して呼びかけておつてくださる呼びかけは、みんな十人おれば十人、ここに何十人の方おられる、みんな私のもう足元まで届いておつてくださるがや。如来様の呼びかけは。我々はそれに気がつくかつかんかや。それが聴聞、仏法に耳を傾けるということを外してはそのことに気づきようがないんです。絶対気づかん、そんなことには。ここで「ほんまにひっくり返つてみたら」ところが転じたらということや。どういふことかといつたら

さっきの浅田正作さんの言葉で言え、我が身がかわいいという思いで生きてきた我が身の生き方が深い悲しみになった時、そこが転じたころです。気がついたら違つた世界が開けてきた。気がついてみたら私の足元からお浄土の世界が開けておつた。そのところを親鸞さまは他力回向の信心と。信心とはそういうことです。如来様の真が私に届いてくださる。

これをご縁にしてね、またこのお寺さんでお参りがあるときは、心

して足を運んでいただいて、ない時は金沢の人は恵まれております。別院へ行けば毎日話を聞けます。どうぞ耳を傾けて一生懸命聴聞して、おかげさんで、あんやとと頭が下がる。そういう世界にね出遇うていただきたいと思ふことでもあります。

最後にね、私いつもお願いするんですがね、皆さんと一緒に皆さん方の今日お経があがつた肉親の方々の元氣な頃の顔を思い出しながら念仏を三回申して終わりたいと思ひます。

な・ま・ん・だ・ぶ・つ
な・ま・ん・だ・ぶ・つ
な・ま・ん・だ・ぶ・つ

この法話録は平成二三年八月の追弔会のものでございます。久しぶりのご要望に応じ活字化したものです。法身在しますことの有難きことをおもし生きる力としたいものです。

※ホームページではこれまでの先生方のご法話を音声でお聞きいただくことができます。

*ホームページアドレス <http://www.jhokoji.net>

*意見・感想は info@jhokoji.net

*メールアドレス info@jhokoji.net